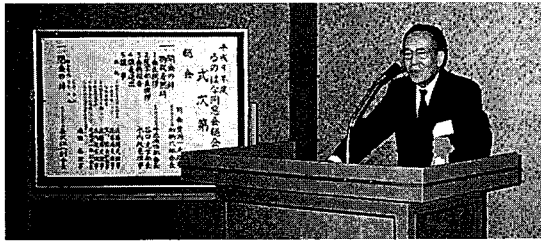




千葉大学医学部同窓会報 第115号

題字 故 鈴木五郎 (大11卒 元るのほな同窓会長)

編集発行者
千葉大学医学部
るのほな同窓会報編集部
〒260 千葉市中央区亥鼻1-8-1
千葉大学医学部内
るのほな同窓会
電話 (043) 222-7171 内線5026



総会にて挨拶をされる井出源四郎会長

平成九年度 るのほな同窓会総会開催

平成9年度るのほな同窓会総会が、東京るのほな会の主催により、平成9年6月28日(土)午後2時より、東京の椿山荘において開催された。物故者への黙祷と井出源四郎会長の最近のるのほな同窓会の活動状況を折りまげた挨拶の後、谷口克医学部長より最近の大学改革の現状などを含めた医学部の近況報告が行われた。次いで、木内政寛常任理事より平成8年度の会務報告が行われた。引き続き、井出会長が議長となり、平成8年度決算と平成9年度予算案、役員改選、名誉会員の推薦などの事項について

討議が行われた。引き続き、平成8年度るのほな同窓会賞の表彰式が行われた(関連記事は第3、4、12面に掲載)。

総会終了後、懇親会が東京るのほな会との合同で行われた。和やかな歓談の中

るのほな同窓会報 寄稿者へお願い

にも、同窓会の活性化を目指した活発な論議が行われ、極めて有意義な会となった。るのほな同窓会報の寄稿者へお願い。本会報へご寄稿の際は、1行12文字とし、人名については、氏名(フルネーム)と卒業年(算用数字)を必ず記載して戴くようお願い申し上げます。

一九九七年(第2回)るのほな同窓会賞の決定
本年2月26日の常任理事会で「るのほな功労賞」の設置が決まり、従来の同窓会賞とともに功労賞の選考も同時に行うことになりました。今回の選考では応募を学術賞(従来の同窓会賞)と功労賞とに分けて行い、左記の如く学術賞に3件、功労賞に3件を決定致しました。

学術賞

市川智彦(帝京大講師泌尿器科学、昭59卒)
前立腺癌に対する転移抑制遺伝子の同定
柴 啓介(千葉大助手耳鼻咽喉科学、平2卒)
発生および上気道反射の中枢神経機構の解析
村上 尚(徳島大助手臨床検査医学、昭61卒)
肥満関連遺伝子ob遺伝子産物(レプチン)の肥満の病態生理への関与の解析

功労賞

武野良仁(日産厚生会玉川病院気胸センター、昭28卒)
自然気胸内視鏡治療の開発
高野光司(ゲッティンゲン大教授生理学、昭33卒) 国際賞
国際(日独)文化交流および破傷風の病態発症機構
Abdul Kadir Dökmeç(アンカラ大教授内科学、アンカラ大一九七二卒) 国際賞
日本トルコ国際医学交流とトルコ消化器病学への貢献
(一九九八年度募集要項は3面をご覧ください)

千葉大学附属図書館亥鼻分館利用案内

利用
当分館はるのほな同窓会会員の方もご利用いただけます。

入館手続

カウンターで同窓会会員である旨お申し出ください。駐車場を使用される場合は臨時駐車証を発行します。地域医療コーナー

昨年の新営にあたって千葉県内の医療に携わる方のために地域医療コーナーを用意しました。ご活用ください。

ライブラリーホール
3階にライブラリーホールが設けられ講演会、研究会等を行うことができます。

人事異動

教授昇任
白澤 浩(昭57) 微生物学
第一(同講師より)
丹沢秀樹(昭57) 歯科口腔外科学(同助教授より)
大沼直躬(昭42) 小児外科学(同助教授より)
藤沢武彦(昭42) 肺癌研究施設第一臨床研究部門(同助教授より)
助教昇任
佐伯直勝(昭50) 脳神経外科学(同講師より)
北 耕平(横浜市立大昭52) 神経内科学(同講師より)

うになりました。利用の条件は担当にお問い合わせください。

開館時間

平日 9時〜20時
土曜日 13時〜17時
学生休暇期間
平日 9時〜16時30分
休館日
日曜日、祝日、学生の休暇期間中の土曜日、年末年始、毎月最終木曜日、11月5日
問い合わせ先
担当 学術資料係長
直通電話 〇四三二二六

講師昇任
杉浦信之(昭54) 第一内科(同助手より)
齋藤典男(昭51) 第一外科(同助手より)
山内直人(昭59) 精神医学(同助手より)
他大学教授昇任
菅野雅元(千大院医昭58)
広島大学免疫学・寄生虫学(本学高次研究免疫機能分野助教授より)
稲垣暢也(京都大昭59) 秋田大学生理学第一講座
野助教授より)

同窓会費の 自動振替について

今年度から口座自動振替による会費納入をお願いしております。

この方式は会員指定の預金口座から、年一回の指定日に会費を同窓会の口座へ自動振替えて頂くものです。

現在、約六〇〇名の会員の方々から新規に自動振替の御申込をいただいておりますが、同窓会活性化のため全会員の御支援をお願い致します。特に若い世代の御協力を期待します。

同窓会会員主催の学術集会などに関する記事の募集について

るのほな同窓会会員が、各種国内、国際学会、研究会、地方会などで学術集会を主催され、広くるのほな同窓会会員にそのアクティビティーをお知らせする必要があります。その内容(学会・研究会名、主催者氏名、開催年月日、開催場所など)を記事にして本会報にお知らせ下さい。尚、本会報の発行は毎年1月末、5月、10月であることをご勘案の上、ご寄稿下さい。

るのほな随想(十)

三輪徳寛先生

奥井勝二(昭和28年卒)

るのほな同窓会報編集委員会から随想記を求められ、かつて同委員を務めた者としてその努力に対して何等かの償いをしたい気持ちから執筆する。世紀末の難しい現代・大学も色々と改革を求められていると聞く、ここで昔を振り返って先人の努力を回顧することも意義あることと思ひ、千葉医科大学初代学長三輪徳寛先生の偉業を偲ぶこととする。

三輪徳寛先生(一八五九〜一九三三)は明治22年第一高等中学教諭として赴任し、大正12年迄在職し、この間千葉医学専門学校外科教授・附属病院院長・千葉医科大学初代学長等の要職につかれた。改めて三輪徳寛伝・千葉大学医学部八十五年史・百周年史を読み返し、その偉大な努力のあとを再認識した。外科学の業績のほかに辛亥革命・国立大学昇格のときなど大変な苦勞をなされた。二・三の事項について記載する。

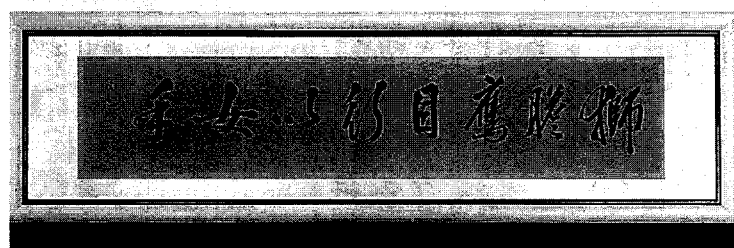
(1)猪之鼻奨学会発足

本会は、大正6年5月8日発足の財団法人であり、本

年は発足80年の節目の年である。発足の経緯・活動状況については百周年記念誌に松本胖先生が詳しく書かれている。即ち大正4年三輪先生の在職25周年に当り、学生、門下生等が祝賀事業として、長尾精一、荻生録造校長の前列に習い銅像建設を計画し、募金二千円余が集まった。先生はこの計画を固辞した。その理由は第一次世界大戦中であり、輸入に仰いでいた医薬品・医療器具などが途絶し研究に支障を来しており、経済不況で苦学生が多いという観点から、さらに浄財を集め、五千円余を基金として財団法人猪之鼻奨学会が発足し、初代会長に選出された。その後歴代会長、委員等の努力によって大きく発展し今日に至っている。これ迄の事業は医学部、薬学部、学生の奨学金の貸与・研究費の補助をさらに薬草園の取得、資金の操作によって本学ならびに関係団体の経済的援助を行ってきた。すなわち現在の附属病院の土地取得(北矢作地区)・

連絡道路の建設・同窓会館建築・記念講堂の建築等に資金の援助等を行なった。なお長尾・荻生両校長の銅像は立派な写真は残っているが、第二次世界大戦中供出の憂目にあつたが、先生のご意志は猪之鼻奨学会として残り活動している。現会長は清水文七先生であり、その現況は会報一四号に同封した猪之鼻奨学会報の通りで会員諸兄のご理解と支援を願う処である。

(2)「獅胆鷹目行以女子」
現在医学部長室ならびに附属病院第一外科臨床研究室に立派な扁額がある。部長室のものは医学部百周年を記念して浅見喜舟先生の書であり、後者(写真上)のそれは松本稷堂氏の書である。この言葉の意味する処は同窓会報72号に鈴木五郎先生ならびに77号に鈴木宜民先生が詳しく書かれているので重複は避けるが三輪先生が外国留学から帰られ病院の手術室に心の支えになる言葉として掲げられたものである。出典は不明であるが医師の心得として残された蔵言である。ドイツ語では、Ein Doktor muss ein Falkenauge, eine Jungfrau und Löwenherz haben.と云ふ。旧病院手術室の壁に大書



されていた文字の写真は残っているが、関東大震災で落ちてしまった。多くの先輩は淋しく思つたらしく、故佐藤豊三郎氏(医専大正11年卒・一外出身)が昭和10年頃鶴岡市在住の書家松本氏に書いて貰つて第一外科に寄贈されたものである。現病院新築の際臨床研究室に移された。

触れている。その一部を紹介する。(Am.J.Surg.124, (2):119,1972)
"A chirurgien should have three diverse properties in his person. That is to say, a heart as the heart of a lion, his eyes like the eyes of an hawk, and his hands as the hands of a woman."
These words were written by John Hall in the sixteenth century. There are other than physical qualifications needed to make the complete surgeon.
この言葉の意味する処は鬼手佛心、智仁勇にも通ずるもので、完全な外科医・良医に求められる格言であり、現在の医学・医療に必要な心構えであろう。

(3)辛亥革命
明治44年の清国の辛亥革命のことについては三輪徳寛伝・小島淑男著、留日学生の辛亥革命(青木書店)によると、当時全国の医学専門学校に多数の留学生がおり、一勢に大きな運動が起こった。千葉医専にも五十名余の留学生がおり、学生運動に発展した。文部省公使館、学校当局は学生に同情的態度を示し、荻生校長、三輪先生も学生が紅十字隊を組織して母国に帰り

傷病者の治療に当たりたいという要望を全面的に受け入れ、救急医療の講習会・医薬品の調達・留学生の直接指導者として、鈴木寿賀治氏(明治36年卒)を依頼した。全国の紅十字隊二百二十名余が帰国した。千葉医専の留学生も十数名参加した。鈴木氏は彼等と同行し現地に渡った。

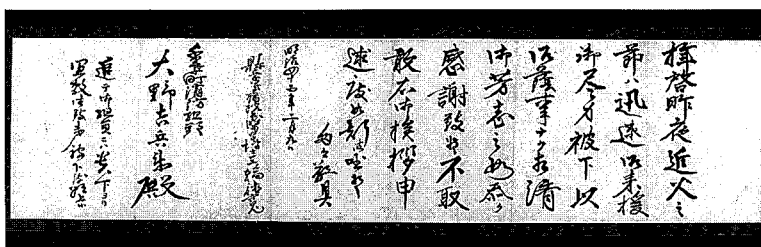
革命終了後隊員の多くは復学し卒業した。彼等は学校当局の支援に対して記念碑を建て感謝の気持を表している。碑文の内容は百周年記念誌巻頭の写真を参照願いたい。

三輪先生がとくに留学生の紅十字隊の行動に協力されたのは、明治維新の函館戦争の際高松凌雲が幕府の医官として出動し、敵味方の区別なく多くの傷病者の救護に当たったことに刺激された処が大きい。ちなみに先生の夫人栄子さんは高松凌雲の長女であり、若い頃からその聲に接しておられたことと思われる。

(4)消防組頭への礼状
最近故小林龍男先生から明治45年2月、失火に対する千葉町消防組頭に対する礼状(写真下)の保管を依頼された。入手の経緯は大野吉兵衛氏の親族大野静風

氏(若葉区桜木町在住)が立派に表装されて大切に保管されていたのを小林先生に保管を依頼された。大野氏は大変偉い先生の書として永いこと持っておられた。小林先生から電話があり早速自宅に参上して戴いてきた。この書は中島伸之教授のもとに保管してある。三輪先生は在職中基礎教室その他から何度か出火があり、管理者として責任を感じていられた。

三輪先生は千葉医科大学退職後は藤沢市鶴沼に住わ

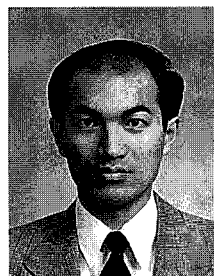


(3面下より2段目に続く)

る の は な 同 窓 会 賞

受 賞 者 の 言 葉

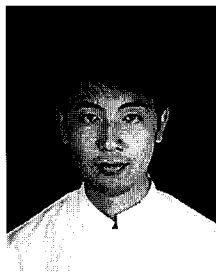
帝京大学医学部附属市原病院泌尿器科
市川智彦 (昭59卒)



このたびは千葉大学医学部泌尿器科学教室教授伊藤晴夫先生のご推薦により、第二回るのはな学術賞を受賞することができ心より感謝申し上げます。さる6月28日、授賞式に出席致しましたが、多くの大先輩方により築き上げられた、るのはな同窓会の伝統の重さをあらためて感じますとともに、名誉ある本学術賞を受賞できたことがたいへん光栄なことであると痛感いたしました。

私は、本年4月より千葉大学医学部附属病院から帝京大学医学部附属市原病院に移動いたしました。伊藤教授のご高配により現在も千葉大学の援助を持って研究を続けております。私が研究を始めたきっかけは、泌尿器科に入局後まもなく、当時の教授であられた島崎淳先生の勧めにより大学院

耳鼻咽喉科学講座
柴 啓介 (平2卒)



に進学したことでした。入学当初は放射線医学総合研究所において障害基礎研究部の早田勇先生(現在障害基礎研究部部長)より染色体についてその基礎から応用までご指導いただきました。その後、Johns Hopkins 大学Oncologyセンターに留学する機会があり、帰国後も千葉大学において、おもに前立腺癌を材料として研究を継続してきました。この間、染色体を応用した研究を一貫して行うことができたことは、自分にとって幸運であったと考えています。

このように今思い起こしてみますと、ただひたすらに研究をし続けてきた中にも、数々の節目や転換点があったように思います。留学もその一つであり、苦勞して得られた細胞株から幸運にも研究が発展したこともありました。今後は、このるのはな学術賞受賞も私の研究生生活にとって大きな節目であったと将来振り返られるよう精進していきたいと考えています。これからもご指導ご鞭撻のほどよろしくお願い申し上げます。

このたび、るのはな同窓会賞をいただきましたことには有難うございました。同窓の諸先生方、特に今回推薦してくださった第一生理中島祥夫教授、入局以来ご指導賜りました耳鼻科金子敏郎名誉教授、今野昭義教授に心よりお礼を申し上げます。私は千葉大学医学部を平成2年に卒業し、耳鼻咽喉科学教室に入局いたしました。2年間の研修後、平成4年に大学院に入学し、第一生理で研究を始めました。大学院時代には、発声運動のフィードバック制御機構をネコを用いて研究していただきました。第一生理での研究は3年間に及びましたが、その間に電気生理学的手法をみっちり叩き込まれました。平成7年の大学院4年生のときにニューヨークのロックフェラー大学に留学する機会を得まして、1年6ヵ月アメリカで過ごすことになりました。あちらでは発声の研究をそのまま続ける事ができ、脳幹の発声制御機構

を少しは明らかにできたと思っています。仕事場がマンハッタンにあり、私も独身の身でしたから、留学生活は本当に楽しくエンジョイできました。昨年9月に日本に帰ってからは、耳鼻科に席を置き、同様の研究を続けているところです。ただ臨床のほうが忙しく、なかなか実験等に時間を割くことが出来ず、研究の方はあまり捗っていないというところが現状です。分子生物学が全盛の現在、私のよう

徳島大学臨床検査医学講座
村上 尚 (昭61卒)



なクラシカルな手法を用いた研究が受賞されるなどとは思っていませんでしたので、学問のはやりすたりに関係なく自分の道を進めば報われるものだと思つたにうれしく思っております。大学卒業以来同窓会会費を一度しか払ったことのない私がこのような名誉ある賞を受賞するのは恐縮の至りですが、受賞後さっそく自動振込の手続きをして毎年ちゃんと払うようにいたしましたのでお許しください。

手として、グルコース輸送体遺伝子の発現調節機構の解析に関する研究を行いました。そして、平成6年9月より、徳島大学医学部臨床検査医学講座(島健二教授)において助手として肥満に関する研究をはじめ、現在に至っております。臨床検査医学講座に移った年の末に、肥満症と関連する遺伝子であるレプチン遺伝子がクローニングされました。本講座が肥満や糖尿病に関して研究している講座であることもあり、講座独自の研究ではありませんが、レプチンに関する研究を行うことになりました。レプチンは主に脂肪細胞から分泌されるホルモンであり、

(4面に続く)

(2面より)

れ悠々自適の生活を送られていたが、晩年は脳梗塞・右手麻痺となり、文書は左手で書かれていた。その文書が多く残っている。

昭和8年2月19日肺炎で五反田三輪病院で死亡された。2月23日青山斎場で盛大な葬儀が行われた。墓地

は上野谷中墓地乙・二号十二一九にある。近くに高松凌雲の墓もある。

なお先生のお名前はトツカンと呼び慣れているが、正式にはヨシヒロとお読みするらしい。Y. Miwaとサインされている文書も残されている。(猪鼻奨学会監事、第一外科前教授)

る の は な 同 窓 会 賞 受 賞 候 補 者 募 集 要 項

第3回(一九九八年度)るのはな同窓会賞の受賞候補者を左記により募集致します。

一、受賞対象者

①学術賞 本会員(甲および乙)で、医学研究あるいは医療活動の顕著な業績により、学術的あるいは社会的に高い貢献をした個人またはグループ。特に学外の教育研究診療機関に居られる方と、学内では学位取得直後の層からの応募を歓迎いたします。

②功労賞 医学および広く文化の各領域において、千葉大学医学部および千葉大学医学部同窓会に多大の貢献をした者。

二、表彰

①学術賞(三件以内) 楯および副賞(総額百五十万円程度)を贈呈します。

②功労賞(一二件) 楯および薄謝を贈呈します。

三、応募方法

所定の申請用紙により、一九九八年1月5日から同30日までの間に申請して下さい。

四、受賞者の決定

常任理事会の議を経て、一九九八年度の総会にて行われます。

五、問い合わせおよび申請用紙請求先

千葉大学医学部内 るのはな同窓会事務局

右選考は、「るのはな同窓会賞選考規定」(るのはな同窓会報第一一〇号参照)および「るのはな同窓会顕彰規定」(同第一一四号参照)にもとづいて行われます。なお両規定は近く一本化される予定です。

(3面より)

レプチン自体やその受容体に変異があると過剰な脂肪蓄積が起きます。レプチンは主に脳視床下部に働き、摂食を抑制するとともに交感神経を活性化し、これにより脂肪分解を促進させます。それ以外に、性成熟にも関与しており、また、末梢への作用として、血球系細胞の増殖作用や脾臓からのインスリン分泌への影響、末梢におけるインスリン作用への影響も想定されます。この分野での研究の進展は非常に速く、我々の教室の

ような少人数ではとても間に合わないようになってきました。受賞したるのは同窓会賞は、千葉大学を卒業後、大学を離れたまま研究している私への励ましであると解釈しており、これを励みに今後とも研究を行っていくと思っています。最後にになりましたが、台風による欠航のため、るのほな同窓会総会に出席できず、申し訳ありませんでした。どうぞ今後とも、同窓の諸先生方のご指導ご鞭撻をよろしくお願いいたします。

◇◇◇◇◇

日産厚生会玉川病院
気胸センター長
武野良仁(昭28卒)



このたび貫洞、小杉、大池諸先輩のご推薦により、私の「自然気胸の内視鏡治療の開発」に対し、功労賞を戴く栄誉を与えられましたことは、身に余る光栄と感謝しております。

私は昭和28年本学を卒業第1外科(河合直次教授)に入局しました。当時教室は主要テーマが肺結核から

勉強していました。縦隔鏡、胸腔鏡など当時我が国ではまだ普及していないものをしっかり学んできました。

帰国して私は早速、気胸を胸腔鏡で治療することを考案し発表しました。新聞、ラジオ、テレビで報道され全国から患者が集まりました。今でこそ気胸の内視鏡治療はあたりまえですが、そのアイデアこそ実は私のものなのです。かつて私は学生時代、肺結核を患い1年間休学し、大学の1内科で人工気胸を続けた身です。それが何の因果か自然気胸の専門家になってしまいました。玉川病院には我が国唯一の気胸センターをつくりました。また今年9月には第1回気胸学会を東京国際フォーラムで私が会長で開催します。古希を過ぎ来し方を振り返るとき、先輩、友人の激励、友情のありがたさをひしひしと感じます。ありがとうございます。

◇◇◇◇◇

ゲッティンゲン大学教授
高野光司(昭33卒)



第二回はるのほな賞を頂戴いたしました。誠にありがとうございます。同窓の皆様に厚く御礼申し上げます。国際賞ということでございますが、頂戴いたしました。桶には「国際文化交流および破傷風の病態発症」とありますので、いっそう嬉しく存じています。松田守弘阪大名誉教授は、私との共同研究で一九九五年に野口英世記念賞を受賞されておりますから。

とを祖国に生かしたいと求めたいです。千葉大学が特に医学部が、私の意見、感想をお聞きになる耳をお持ち下さるようお願いもうしあげます。そうすることに、国際賞をいただいたより、国際賞をいただいたご恩に報いることができることになると思っています。



北陸るのほな同窓会

富山県では2年連続しておめでたい会を行いましたのでご連絡いたします。

一、辻陽雄(昭33卒)医学部長(就任および布施秀樹(昭51卒)教授(就任平成7年11月1日付けで富山医科薬科大学整形外科学士教授が医学部長に就任されました。また平成8年4月1日付けで泌尿器



とかく、このような機会には、外交辞令的なご挨拶が多いようですが、私はあえて、心から具体的な提案を申し上げました。同窓会の皆様、特に千葉大学にご在籍の皆様が、真剣にご対応くださることを心から祈るものです。

科学布施助教授が同教授にご昇任されました。お二人のお祝いの会が同年5月8日に富山市の奥田屋にて開催されました。出席者は14名。会は四家正一郎(昭26卒)金沢医大名誉教授の祝辞と片山喬(昭30卒)副学長兼病院長の乾杯にて始められました。辻医学部長のこれからの教育医療に関するお話には一同身のひきしまる思いでしたが、紅一点田村須賀子(看昭59卒)先生のおかけか、その後例年になく盛り上がりとなり、寺澤捷年(昭45卒)教授の万歳にて閉会となるまで終始にぎやかで楽しい会でありました。

二、濱崎智仁(昭46卒)教授(就任平成9年6月1日付けで富山医科薬科大学第一内科濱崎智仁講師が同和漢薬研究所臨床利用部門教授に就任されました。お祝いの会が7月3日に同じ奥田

屋で開催されました。出席者11名。会は辻医学部長の祝辞と本会最年長であられる小西善磨(専18卒)先生の乾杯で始められました。濱崎教授の「教授の仕事はよく教育・診療・研究といわれるが、むしろサービス業というべきではないか」との感想には多くの方が頷いておられました。会参加者の近況報告、記念品の贈呈などにてなごやかに進み、野本昌三(昭32卒)先生の元氣一杯の万歳三唱で散会となりました。千葉を遠く離れたここ富山医大では本学出身者は少数派であるにもかかわらず、これで副学長、医学部長、4教授の要職に就いていることとなり、本学がいかに多くの優秀な人材を輩出しているかについては驚きとともに誇りを覚えるところです。写真は前列左から野本昌三、濱崎智仁、小西善磨、辻陽雄、布施秀樹、長尾竜郎(昭40卒)、星山圭敏(昭44卒)、磯村勝美(昭43卒)、寺澤捷年、秋元晋(京府昭54卒)。

(伊藤隆・昭56卒・記)

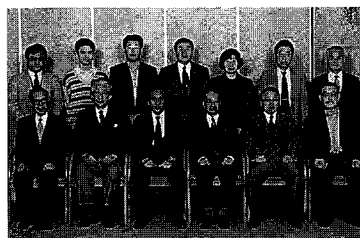


安房ゐのはな会

平成9年4月18日(金)、安房ゐのはな会(会長 野原宏)が館山市夕日海岸ホテルに、千葉大学医学部産科婦人科学講座関谷宗英教授をお迎えして開催された。

総会終了後、『中高年女性のプライマリケア』と題し、閉経後30年間の医療の必要性など、高齢化の進む当地区の実情と併せ、大変興味深い講演を頂き、また大学の民営化、大学教官の任期制等最近の大学情勢についてもお話を伺った後懇親会となった。

当日出席者・野原宏(専17)、伊賀多朗(昭22)、本位田泰介(昭28)、貴家昭而(昭30)、蟹澤晴子(昭32)、原久弥(昭34)、青木謹(昭36)、関谷信平(昭38)、植木良裕(昭53)、堀誠司(昭58)、渡辺啓治(昭61)、河野世章(平6) (関谷信平記)



千葉県ゐのはな会

総会(第二回)

千葉県ゐのはな会は、平成8年4月11日設立総会をもって新しく発足し、早くも一年が経過した。千葉県下の学外の「ゐのはな会」として、会員相互の親睦と向上をめざし、例えば相互診療協力、情報交換などに、若い医師達にも参加していただき、活力をもった会に発展させることを目標にして、組織作りを進めている。

平成8年11月26日会員名簿発行。千葉県下、10ブロック約三千名の住所別名簿を作成したが数々の問題点もあり、例えば、索引が無く引きにくい、会員、賛助会員の区別が混乱しているなど指摘されている。これらの点に関してはその後行われた三回の役員会で討議され、次回の名簿には改善・改訂する予定である。

千葉県ゐのはな会平成9年度総会は平成9年5月8日(千葉京成ホテルに於て)に開かれた。出席者35名。*司会進行、柏谷秀雄(専25)理事。

*渡辺武(昭27)会長から「医療をとりまく環境ははなはだ厳しいものがある。情報交換と信頼関係を自ら築いていく積極性

が求められている。その場の一つとしてこの会がある」と挨拶があり、会長が議長となり議事を進められた。

*会務報告、越川衛(専23)理事。名簿発行、会員数設立総会、役員会等の報告があった。

*会計報告および監査報告 石橋祝(昭22)理事、国井光智(昭21)監事。

*協議事項、名簿改訂案について索引の作成、会員賛助会員の明確化につき協議され了承を得た。

*次いで、井出源四郎同窓会長、東京ゐのはな会加納六郎会長、大学ゐのはな会佐藤南夫(昭35)常任理事より激励の言葉をい

ただき、香田真一(昭31)副会長の挨拶で閉会した。続いて、三枝一雄(昭32)理事の司会で記念講演・「癒としてのケア」(麗澤

大学教授・水野治太郎先生)があり「ケアの人間学再考」を拝聴した。

懇親会は、茂又真祐(昭22)理事の司会、川越不二男先生(昭14)の乾杯で開会新旧こども、和氣に溢れた歓談の一夜となった。

千葉県ゐのはな会は、新しく発足してから日が浅く、また、ゐのはな同窓会は、学内支部・東京ゐのはな会・

県内各地区ゐのはな会と多重構造となっているため混同されている方もあるやと思われま

す。発足時にありがちな不備を是正しながら踏み出した「千葉県ゐのはな会」には是非とも参加していただき、ご意見を賜るようお願い致します。

なお、6月5日に役員会(反省会)を開き、名簿、曜日に配慮した総会開催の日時など会員からの要望・意見を参考に今後の運営に生かすことを申し合わせたことを付記致します。

(森博志・昭31・記)

東京ゐのはな会支部長会議事録

平成9年7月30日 午後6時開催

出席者 加納六郎(昭20)会長、貫洞一夫(昭22)副会長、長沢仁一(昭24)副会長、小川源太郎(昭27)、山上健次郎(昭17)、小杉秀雄(昭24)、田中光(昭24)、大池和祐(昭24)各支部長、小幡裕(昭28)勤務医部会長、新田実男(昭22)、武野良仁(昭28)、内藤徹郎(昭22)副部長、計12名

加納会長から、雨の中を御苦労様という御挨拶あり、進行を小杉城西支部長が行

うよう指名あり、次の議題について協議が行われた。議題一 名簿、会報の配布および費用の件

議題二 会費徴収促進の件 まず貫洞副会長から、平成8年度決算後の繰越金と平成9年度予算案の中間期なので御意見を伺いたい、との発言あり。

①貫洞副会長報告：名簿は五〇〇部作成、製作費95万円であった。(東京海上より5万円補助)

②山上城東支部長(経理担当)が会費徴収担当者として出金担当者との役割分担がはっきりしないので検討して欲しい、との意見を述べた。

③村瀬靖(昭30)経理広報部長報告：会報は二〇〇〇部印刷、消費税及び郵送用封筒を含め二二万八千九百〇〇円の費用がかかった。広告料収入は40万円あった。総会出席者、広告を出した会社に頒布したが、なお一、二〇〇名全会員に郵送する部数が残っている。

④平成8年度繰越金から名簿代90万円を支払う事とするが、現在会報印刷費支払いには繰越金が40万円不足している。この費用は名簿印刷費を含め、平成9年度予算の収入か

ら支出する計画であったがとりあえず総会に間に合うよう全力を上げられ努力実現した結果であり、感謝と共に出席者全員の御了解を得た。

⑤山上支部長の紹介で江戸川区医師会で多年印刷依頼しており、今回の「会報」を作成された和田フオトリス印刷営業部加藤氏から会報郵送の封筒、宛名貼り、切手代、払込用紙の見積りなどの説明があり、「当社に任せてもらえば振込用紙に予めプリントすることで年会費未払会員が分かるよう次回から実行しても宜しい」とのこと。これにより会費払込者増加が見込まれる。又今回は会報郵送に際して、年会費払込用紙、名簿代を同封の上発送する事とし、同社の好意に甘えてこの際発送事務を委託する事に全員賛成した。尚、重ねて加藤氏は、平成9年度会費の納入分で諸費用を支払う事で了解し、今回は未払いのまま発送事務を行います。と明言された。従って、と

りあえず平成8年度繰越金の中から平成9年度名簿出版代90万円を十一房印刷社に支出する事に決定した。(その内の10万

円はゐのはな会本部より援助された。)

⑥武野勤務医部会副部長は名簿代払込者にのみ名簿を送する事を了承した。なお、会費納入促進策として、各支部長がその支部から会報に投稿する依頼を各幹事を通してお願いしたら、参加意識が盛り上がると思うとの発言あり。全員賛成。

⑦会員の住所変更、永眠者などの通知は東京ゐのはな会事務局でなく、玉川病院内東京ゐのはな会連絡事務所としたら、との長沢副会長の提案あり。尚、今後の名簿作成時、勤務医は所属、専門分野を記載し、病診連携の実をあげるために工夫ありたいと実例を挙げての提案もあるも、本日の議題外なので後日検討する。

⑧村瀬会計部長の小林助手が退職されたので村瀬氏は今回辞任し、後任は距離的に近くに居住する城東支部内の会員から、山上城東支部長が早急に選任して下さいようお願いする事となった。その結果、城東支部内の葛飾区の赤畑正光(専24)先生の御承諾を得た。

議事録作成 小杉秀雄(企画担当)

栃木県るのな会

平成9年1月30日に栃木県るのな同窓会が宇都宮市・ホテル・ニューイタヤにて小児外科・高橋英世現名誉教授と泌尿器科・伊藤晴夫教授をお迎えして開催された。

高村良平(昭23)会長の挨拶に続いて柴崎晃(昭28)幹事より会務報告があり、その後、故渡辺常美(昭19)会員・高安周雄(昭13)会員に對して黙祷が捧げられた。

高橋教授には「大学の近況」伊藤教授には「腎臓結石に関する二・三の最新知見について」と題した講演を聴いた後、盛大な懇親会を開催した。

栃木県におけるるのな会員の活躍には目をみはるものがあり、独協医科大学には7名の教授(法医・上山滋太郎(昭33)、胸外・嶋田晃一郎(昭37)、麻酔・崎尾秀彰(昭44)、産婦・稲葉憲之(昭47)、アレル



ギー内・福田健(昭48)、生理・堀雄一(昭52)、細菌・丹羽章(昭38)がおり、また栃木市の下都賀総合病院も川村功(昭43)院長以下内科・外科など殆どるのな会員がスタッフとなっており、千葉大学栃木分院のようです。

大井利夫(昭35)院長の率いる鹿沼市の上都賀総合病院もこれまた千葉大学鹿沼分院と言っても良いくらいオール・スタッフがるのな会員です。

新装なった塩谷総合病院も滝沢弘隆(昭40)院長以下ほとんどがるのな会員で千葉大学塩谷郡分院といっても過言ではありません。このような背景もあり、今

年度は45名の出席者があり、幹事一同はウレシイ悲鳴をあげました。また今年度は伊藤教授が来るということで、宇都宮市・済生会泌尿器科・森俣久夫(昭51)部長をはじめ県下のるのな会・泌尿器科関係のドクターの出席が多く、また若いドクターの出席が目立ちました。

今年はいじめて出席の新会員には自己紹介をしてもらいましたがなかなかユニークな方もおられました。このように栃木県るのな会も頑張っております。

報告が遅れましたが、昨年度は昭25卒・片山一郎栃木県医師会会長が勲四等瑞宝章を受章しました。そして祝賀会をして会員一同にその栄誉を称えました。

(坂田早苗・昭34・記)

クラス会

昭八会
(昭和12年卒)

昭和12年卒という、誰もが85歳前後で、脚、腰の弱りが目立つ。そこで脚の負担を少なくするために、新幹線も、総武線も直通の、しかもその構内にあるステーションホテルに会場を



選んだ。改札口から5分、ホテルの宴会場に着く。歩行のやや不自由な会員を見つけたホテルのボーイは、改札口から車椅子で会場まで運んでくれた。

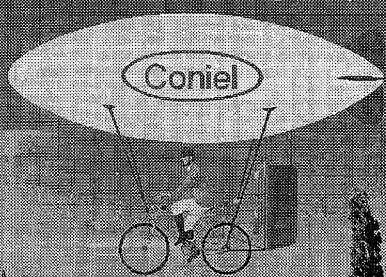
会するものは植竹順夫妻、岡村正明、小松源二、鈴木敏とご令嬢、林武夫夫妻、久富良次夫妻、菅井規矩雄夫妻の12名。会が一番遠い名古屋から参加された林兄の乾杯の首頭に始まり、ついで先年叙勲の栄に浴された2人の会員に、クラスから心ばかりの祝いを贈呈した。

雑談にはいと、トイレが近くなって困るとか、脚や腰などのウィークポイントを嘆く声のなかにも、庭の草むしりに追われる人、読書や美術鑑賞に明け暮れる余裕のある半面も見えて、それぞれ生活を楽しんでいるようであった。わたくしもご多分に漏れず、時にはアスリカン・デイスボヤ、ハルナールのお世話になっているが、日本も高齢化が進み、4人に1人は他の3人に養われる時代になってきた。他人の厄介になるのはいやなので、バランスのとれない脚を操作しながら週四・五日は現役として地域医療にささやかな奉仕をしている。同窓生諸君、生ある限り、精いっぱい生き抜こうではないか。

「来年度は場所を変えて地方へこないか。案内するから」という元気な声もあったが、さすがに「ここは動きが少なくすむから、ここがいい」「ここが今まで一番良い場所だ」という声が大勢を制した。いづれにしても、まだまだ昭八会を続けるつもりらしいから、頼もしい限りだ。

(幹事、菅井規矩雄・記)

For life long therapy
Coniel: Slow onset & Long lasting



【効能・効果】高血圧症、腎実質性高血圧症、狭心症

【使用上の注意】

1. 一般的注意

- カルシウム拮抗剤の投与を急に中止したとき、症状が悪化した症例が報告されているので、本剤の休薬を要する場合は徐々に減量し、観察を十分に行うこと。また、患者に医師の指示なしに服薬を中止しないように注意すること。
- 本剤の投与により、まれに過度の血圧低下を起こすおそれがあるので、そのような場合には減量又は休薬するなど適切な処置を行うこと。
- 降圧作用に基づくめまい等があらわれることがあるので高所作業、自動車の運転等危険を伴う機械を操作する際には注意させること。

2. 禁忌(次の患者には投与しないこと)

- 心原性ショックの患者[症状が悪化するおそれがある。]
- 妊婦又は妊娠している可能性のある婦人[動物実験にて胎仔毒性、妊娠末期の投与による妊娠期間・分娩時間の延長が報告されている。]

*用法・用量、その他の「使用上の注意」は製品添付文書をご参照下さい。

高血圧症・狭心症治療剤(持続性Ca拮抗薬)

コニール錠[®] 2・4・8

Coniel Tablets
塩酸ベニジピン製剤2mg・4mg・8mg錠

(薬価基準収載)

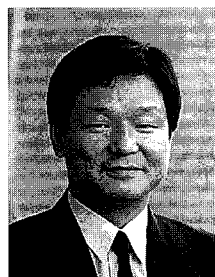


製造発売元 (資料請求先)
協和発酵工業株式会社
東京都千代田区大手町1-6-1

就任挨拶

微生物学第一講座

白澤 浩 (昭57卒)



平成9年7月1日付けで清水文七教授の後任として、本学微生物学第一講座を担当させていただきますことになりました。

本講座は、大正14年に衛生学教室より分かれた細菌学講座に始まり、時代への対応から微生物学講座と名を変え、更に細菌学を担当する微生物学第二講座の新設に伴い微生物学第一講座へと変遷して来た伝統ある教室です。この間、緒方規雄教授、羽里彦左衛門教授、川喜田愛郎教授、桑田次男教授、清水文七教授という秀でた先達によって主宰され、ここに紹介するには紙面が足りない程数多くの優れた医学者を輩出して来ましたが、中心となる研究内容も、リケッチア、フアージ、日本脳炎ウイルス、インターフェロン、腫瘍ウイルス、

パピローマウイルスと時代に対応しながら変化して参りましたが、つゝが虫病リケッチアの分離・発見の業績に象徴されるように、常に微生物学の中のフロンティア領域での研究に取り組み、業績を上げて来ましたが、このように伝統ある教室を任され、大変光栄でありますと共に、その重責に身が引き締まる思いであります。

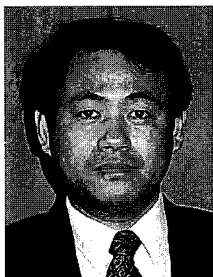
私は昭和57年に本学医学部を卒業後、恩師高見沢裕吉教授(昭27卒)が主宰されておりました産科婦人科学教室に入局し、千葉大学医学部附属病院で一年の研究後、癌研究会附属病院婦人科で婦人科癌の臨床研修を2年間行いました。昭和60年に大学に戻り、産科婦人科学教室の大学院生として、微生物学第一教室の清水文七教授(昭33卒)に師事し、子宮頸癌との関連性が注目されつつあったヒトパピローマウイルスの研究に着手致しました。当時、パピローマウイルスと子宮頸癌との因果関係

を明らかにするために、世界中の研究者がパピローマウイルス研究に手を染め始めた時でした。大学院3年生の時に、日本学術振興会特別研究員(がん)に採用されたことがきっかけとなり、大学院卒業後も基礎研究を続ける決意を固めました。大学院卒業後の平成元年に、微生物学第一講座の助手にさせて頂き、以来、恩師清水文七前教授の御指導の下、ウイルス学の研究・教育に研鑽を積んで参りました。

今日のウイルス研究は、単なる病原微生物研究としてのウイルス研究の枠を越え、一般生命科学研究に無くてはならない分野となっております。一例を挙げれば、

歯科口腔外科学講座

丹沢秀樹 (昭57卒)



平成9年7月1日付けで、佐藤研一前教授の後任として、歯科口腔外科学講座を担当させていただきますことになりました。

千葉大学医学部歯科口腔

ば、レトロウイルス、アデノウイルスなどの基礎研究が進んだウイルスは、遺伝子の運び屋としてのウイルスベクターなどとして利用されるようになり、人類の僕べとして利用されつつあります。一方で、未知のウイルスもまだ数多く存在すると考えられますし、従来存在しなかった新しいウイルスも今後出現してくるものと十分予想されます。そうした中で、臨床教室との連携を密にとりながら、常に医学に立脚したウイルス学の研究を更に発展させた

とと考えております。今後変わることもなく、るのはな同窓会の諸先輩の御指導・御鞭撻をお願い申し上げる次第です。

たす覚悟です。私は千葉大学医学部を卒業後、東京医科歯科大学歯学部に入學・卒業いたしました。その後、千葉大学に戻り、一年間の研究生、四年間の大学院生活を経て、文部教官として歯科口腔外科学の発展に努めてまいりました。

研究面では、大学院において微生物学第一講座の清水文七教授(当時)の御指導を受け、分子生物学に接したことがきっかけとなり、以来、歯科口腔外科学教室内に核酸・蛋白の総合的研究室を作り、発展させてまいりました。研究の大きな柱としては、発癌過程の解析、口腔癌の遺伝子的診断法などの研究があげられます。もう一つの柱としては、軟骨・骨・歯の発生・分化調節・細胞外基質とミネラルのバックギンク機序などの研究があります。この他、教室員の興味のある研究をできる限り自由に行うてまいりました。この結果、多くの学内他講座、学外施設、国外の大学・研究所からも御指導を受け、共同研究、人的交流を行えるようになったりました。この間の佐藤前教授をはじめとする周囲の方々のご理解とご支援に感謝しております。期待

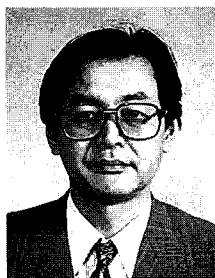
にこたえる意味でもさらに発展させる所存です。

私は多くの方から臨床技術を教えていただきました。

特に、頭頸部に限らず全身の外科手術を学ぶ機会を与えていただいたことが、私の財産となっています。感謝を申し上げます。私の臨床の特徴は、大学における臨床としては当然のことではあります。が、臨床の問題点を基礎的、学問的に分析し、その結果を治療に結びつける努力を意識的に行い、また、そのように医局員にも指導を行っているということです。今後、このような努力を積み重ね、いくつかの疾患に対

福岡大学内科・健康管理学講座

山田達夫 (東医歯大・昭49卒)



平成9年4月1日付けで福岡大学医学部内科・健康管理学講座の教授として着任いたしました。私は東京医科歯科大学卒業後、山梨県立病院、順天堂大学を経て千葉大学に勤務いたしました。が、このたびの栄誉は

して、従来の診療パターンとは異なった治療方法を開拓したいと強く願っています。

今後、地域医療に貢献できるすぐれた臨床歯科医師を育成すると共に、地域歯科医療の中心的役割を果たせる関連病院を質、量共に拡充したいと思っています。また、他教室および他施設との交流・連携につとめ、部局、施設、国境を越えたボーダーレスな共同研究を行い、大きな意味で口腔科学の一翼を担う教室として発展したいと心から切望しています。皆様からのご指導、ご鞭撻を何卒よろしくお願い申し上げます。

のはな同窓会諸先輩のお力添えによるもので、心より御礼申し上げます。私は平山恵造現千葉大学名誉教授のご指導の下で数多くの神経疾患の診療を行いながら神経難病にしばしば認められる不随意運動の研究を行い、東北大学では難病治療の立場からリハビリテーション学を修得しました。千葉大に再び戻ってからは主としてParkinson病の認知障害を解明すべく

神経心理学的研究、疫学調査や治療研究などにも取り組みました。最近10年間の主要な研究課題はParkinson病等の錐体外路系疾患とAlzheimer病などの高齢者にみられる神経難病を対象としたもので、免疫学、分子病理学、分子生物学的アプローチによる早期診断法の確立と病因の解明に向けた活動を行ってきました。

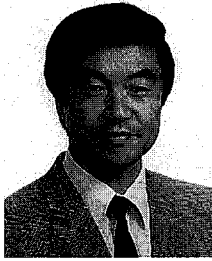
私の配下に内科のもう一部門が増える可能性さえありますので益々その重責をかみしめております。私はこの数年間は教室の基礎固めの時期と考えておりますが、primary care医の養成、神経科学研究など多くの課題に全力で取り組む所存であります。

九州には同窓会の諸先輩が活躍しております。すでに何人かの先輩からご指導を賜っておりますが、何卒皆様方のより一層のご指導、ご鞭撻をお願い申しあげること第であります。

今後ともよろしくお願いいたします。

琉球大学脳神経外科学講座

吉井 與志彦 (昭44卒)



平成9年5月1日付で、琉球大学医学部脳神経外科講座の教授を拝命いたしました。私は、昭和44年インターン、大学院等、医学・医療教育に於ける問題点が提起された時代に卒業しました。病院長との研修協定

で、精神・神経医学教室にて精神医学を約半年学び、その後牧師(当時)の脳外科班で脳外科研修を始めました。昭和46年、千葉大学脳神経外科学講座開設に伴い、初代牧野博安教授、牧野助教の下で脳神経外科学の研鑽を続け、専門医取得後、昭和51年、筑波大学医学専門学群、脳神経外科に牧野教授が就任された年に筑波に移り、以来約20数年間を過ごしてきました。

主に「Gliomaの治療」をテーマに研究させていただきました。その間、放医研での併任研究、米国UCSF留学等の機会を与えていただきました。牧教授の定年退職後、能勢忠男教授(昭和42年卒)が昇任され、私も助教として、9年間仕事をさせていただきました。琉球大学医学部は、昭和43年に開設された保健学部を母体として、昭和54年に開設されましたが、脳神経外科学講座は、昭和59年に開設され、初代教授に六川二郎先生(岡山大、昭和31年卒)が就任され、その二代目ということになります。

現在、教室員は、教授1、助教1、講師2、助手5、(内留学2名)、医員、研修医各1名で研究、教育診療にあたっております。関連病院は、宮古・石垣の離島に、県立病院があり、その病院も含め、10病院あります。関連病院数の割に、医局員の絶対数が少なく、赴任早々から、関連病院の人事に追われています。

現在、関連病院の位置づけ、臨床研究の対象疾患、研究手法の整備を行い、チーム研究の体制づくりに努力中であります。沖縄には全く縁故関係がなく、不慣れな点が多々ありました。が、幸い琉球大学内では、先輩の中野政雄名誉教授(放射、昭30年卒)、古謝景春教授(第2外科、昭和39年卒)、同級の高良宏明教授(整形外科、保健管理センター長、後輩の戸板孝文助手(放射、昭63年卒)、小川和彦助手(放射、平3年卒)がおられ、色々アドバイスを受けております。殊に、高良教授には、同級の気安さで、相談ののつてもらっています。又、同門の先輩の嶺井先生(嶺井病院長、昭38年卒)は、沖縄で初めて脳外科医療をされた方で、沖縄脳外科医会での信頼も厚く、心強いばかりです。

学外では、同級の落合靖男(沖縄小児発達センター院長、真栄城弘史(真栄城内科院長)、照屋功(照屋内科院長)をはじめ、沖縄のみな会の諸先生方にも、温かい励ましのお言葉やアドバイスをいただいております。

沖縄は、現在、離島も含めると、人口約一二〇万人で、脳腫瘍、脳血管障害、外傷等が多い傾向にあります。教室のテーマは、私が永年関係してきました脳腫瘍(特に悪性神経膠腫)の治療を中心に、基礎と臨床の両面から研究する、教室運営を考えております。

広島大学免疫学・寄生虫学講座

菅野 雅元 (千大医58卒)



このたび、広島大学医学部免疫学・寄生虫学講座を担当することになり、本年9月1日付で赴任致しました。

私は、一九七九年に本学医学研究科博士課程に入学し免疫学を専攻して以来、18年に渡り本学医学部にお世話になりました。この間、一九八三年から環境疫学研究施設免疫研究部の助手を務め、谷口克教授のもとで、

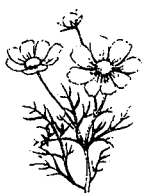
これら諸問題の中で、近未来的な面からも、憶意、技能、感性の備わった医師への学生教育、問題解決型、高度な専門家育成の臨床研究体制の確立、地域医療との密接な提携等と、やるべき事は山積しております。沖縄の大地にしっかりと足を付けて、信念をもって琉球大、ひいては沖縄の脳外科学の発展にお役に立つべく運営をしていく所存であります。幸い、琉球大学の

卒業生が着実に増加している現在、将来への希望をもたせてくれます。

これまでの間に、色々な所で御援助、御世話いただいた、るの は な 同窓会の諸先生方に、この紙面をかりて、厚く御礼申し上げますとともに、今後とも、同窓の諸先生方の一層の御指導、御鞭撻をお願い申し上げます。

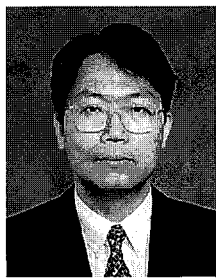
下優毅教授(現産業医大)、私で三代目になります。本年4月より免疫学・寄生虫学講座に改名されました。現在の教室員の構成は、助教1、助手1、教務職員1でスタート致しましたが、今後は研究室に若い力を結集し、医学・生物学に新しい流れを造るべく研究・教育に専心努力する所存です。

今後とも、同窓の諸先生方の一層の御指導、御鞭撻をお願い申し上げます。



秋田大学生理学第一講座

稲垣 暢也 (京大・昭59卒)



学的手法を取り入れた時期でありました。

平成9年9月1日付で、初代小川哲朗教授の後任として秋田大学医学部生理学第一講座を担当させていただきました。私は昭和59年に京都大学医学部を卒業後、内科学の道を選び、京都大学医学部附属病院ならびに田付興風会北野病院にて内科の研修を行いました。その後、井村裕夫教授(現京都大学総長)が主宰されていた京都大学医学部内科学第二講座に入局と同時に、京都大学大学院医学研究科に入学し、病態栄養学教室の清野裕助教授(現京都大学病態代謝栄養学教室教授)の直接の指導のもとで糖尿病の研究を始めました。特にインスリン非依存型糖尿病の成因の解明が教室のテーマでしたが、私が研究を始めた当時は、現在とは異なり分子生物学的研究を行っている臨床教室も殆どなく、教室員一同で積極的に分子生物

平成4年に大学院を修了後直ちに千葉大学に移り、アメリカでいち早く糖尿病研究に分子生物学的手法を導入され帰国後本学の高次機能制御研究センター発達生理分野に着任された清野進教授の指導のもとでさらに糖尿病の成因の分子生物学的研究を続けることができました。以来、現在に至るまで清野進教授はもとより諸先生方に終始変わらぬご支援とご指導を賜りました。この紙面を借りて衷心より御礼申し上げます。

私は、千葉大学では特にインスリン分泌細胞のイオンチャネルや受容体を介するシグナル伝達機構の研究を中心に行っていました。いわゆる正統な生理学を学んできたわけではありませんが、従って、これから秋田大学にて生理学教室の系統講義や実習など先代の教授が築かれたものを引き継いでいくにあたり、その重責に身の引き締まる思いです。しかし一方では、基礎研究は益々ボーダレスになりつつあり、これまでの既成の

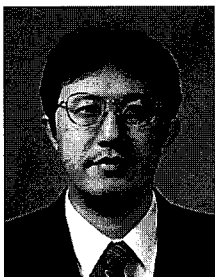
概念にとらわれない自由な発想が求められています。これからは、これまで行ってきた分子生物学的手法に電気生理学、細胞生物学、生化学などの手法を組みあわせながらインスリン分泌細胞や神経細胞の機能を分子レベルで研究していきたいと考えています。

現在、秋田大学では、耳

浜松医科大学精神神経医学講座助教授の就任にあたって

浜松医科大学精神神経医学講座

伊豫 雅臣 (昭59卒)



平成9年1月1日付で、浜松医科大学 精神神経医学講座 助教授に就任いたしました。私は昭和59年に千葉大学医学部を卒業し、千葉大学の精神医学講座に入局いたしました。昭和61年10月から今回の転任まで、市川市にあります、国立精神・神経センター精神保健研究所薬物依存研究部に在籍しておりました。

千葉大学から国立精神・神経センターに在籍している間は、ドーパミン神経伝達と細胞内情報伝達に関す

鼻咽喉科の戸川清教授(昭32)、救急医学の稲葉英夫教授(昭54)が活躍されておられます。私も、これらの先輩に続いて、教室の発展に全力を尽くす所存です。今後とも同窓の諸先生方の一層のご指導ご鞭撻を賜りますようお願い申し上げます。

る精神疾患の動物モデルを用いた薬理生化学的研究、薬物依存に関する疫学研究、及び放射線医学総合研究所においてポジトロンCTの精神疾患への応用に関する基礎及び臨床研究などを行なって参りました。これらに関しては、前薬物依存研究部長の福井進先生(昭36)始め、放射線医学総合研究所の先生方や、多くの先生方にご指導、ご鞭撻を仰いで参りました。

浜松医大では、教授を始め、医局員の方々皆さん大変好意的に接してくださり、まだ半年を経過したにも関わらず、何年もあるような錯覚すら感じてしまいます。当教室は、平成8年4月に現在の森教授に代わり、ま

だ若い医局です。まさにこれから新しい教室を造っていかうという時期に呼んでいただけて大変幸福です。浜松医大では大学を挙げて業績を重視する風潮があります。まだ若い教室であるため、研究に関しても準備段階ですが、皆さん意欲旺盛なので楽しく将来に向けて取り組んでおります。また、伝統的に神経症の治療法としては森田療法という我が国独自の治療法があり、現実に良好な治療成績を上げております。新しい教室としては、この伝統を引き継ぎながら、更に科学的に整理して国際的にも通用する治療法にしようと取り組んでおります。研修医の方達の研修システムも森教授が積極的に静岡県内の病院と連絡を取り合い、充実しつつあります。それらに少しでもお役に立てればと頑張っていきたいと思えます。

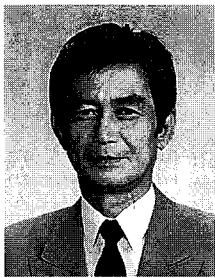
先月には浜松市を含む静岡県西部の「るのほな同窓会」がありました。浜松医大や浜松周辺には千葉大出身の先生方も数多くいらっしゃりご活躍中で、大変心強く感じております。精神科の先輩にはいろいろと静岡県の地域医療について教わる機会を得ることができ、また、他科の先生方にもい

ろいろと臨床上ご援助を受けることができ、何とかやっていけそうな気がしております。浜松へはひとりで来たような感じを持っておりましたが、千葉大学の多くの先輩達にアドバイスを頂け、また、医局の方達にも好意的に接して頂け、大変充実した毎日を過ごすことができております。

光学医療診療部助教授就任の挨拶

千葉大学医学部附属病院光学医療診療部

神津 照雄 (昭44卒)



一年間の国保成東病院院長を経験し、平成8年8月1日付で光学医療診療部部長として再び千葉大学に戻りました。成東病院での管理職はそれなりに自分を教育してくれました。

さて、聞きなれない光学医療診療部とは何か。英文のDepartment of Endoscopic Diagnostics and Therapeuticsの方が理解されやすいと思います。平成3年に京都大学に新設されていた、千葉大学を含め現在、国立大学10病院に光学医療診療部が設置されています。

千葉大学では昭和53年に

ができております。浜松は、太平洋に面しており、気候も温暖で千葉に似て、生活しやすいところです。るのほな同窓会の諸先生方も浜松へいらっしやる折にはご連絡いただければ幸いです。

今後ともよろしくお願いいたします。

現在の病院に移転した際に、今日の形式を予想して高橋英世名誉教授の運宮の下、中央システムがとられてきました。そして8年度予算が組まれ新設の中央診療部門となりました。光学医療診療部のスタッフは助教授・部長の他、助手1、医員2、臨床検査技師1、臨床工学技師1、看護婦3です。また本学の光学医療診療部には他の大学で不便さを訴えているX線透視室は4室あり、中央放射線部の協力で適宜現像・機器の管理を行って頂いております。各科の医師が光学医療診療部に来て検査・治療を行う方式は従来と同様ですが、独立した中央診療部門をいかに発展させていくかは、私に課せられた大きな宿題であります。大所帯の第二外科教

室の1講師として勤務していた時とは異なり、小さい所帯ながらも独立した診療部であるので、対外的な折衝は当然、自分の責任で行わなければなりません。まず初めに病院運営関係者のご尽力で平成9年2月から光学医療診療部の外来を開設させて頂きました。次の課題は大きく変わる保険診療制度に対応する。Surgery systemの充実に焦点を絞っております。病診連携を念頭におきながら大学病院でしか出来ない診療をと心掛けております。また教育面では少ない教官で卒前教育としての、臨床入門、臨床実習を従来の系統講義では得られない魅力ある視覚教育へと心掛け、卒後教育では指導医、専門医、認定医による指導システム確立を目指しております。研究面に関しては本邦ではこの分野の速さは著しく、気を抜くことは出来ません。しかし自分達のアイデアで新しい機器の開発ができるのも光学医療診療部の魅力の一つです。現在の悩みは部員室、患者の更衣室がないこと、リハビリベッドの不足していること、関節鏡などができる清潔手術室がないこと、短期入院のルートがないことなど多い

くの問題点が山積みされています。しかしこのように悲観的な面だけではなく、千葉大学の光学医療診療部に外国からの留学希望者も出て参りました。これも偏に今まで千葉大学の名前を高めてくれた同窓の先輩達のおかげと認識しております。

労働福祉事業団 千葉労災病院院長就任の挨拶



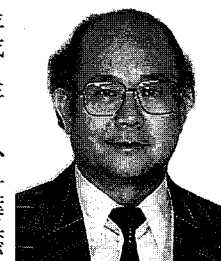
高橋 英世 (昭32卒)

す。これからの課題は各診療科の枠を越えたバランスの取れた管理運営、教育方法の改善と共に、光学医療診療部としての特殊診療・研究の基盤づくりに専念する所存であります。同窓の諸先生方のご支援、ご鞭撻を切にお願い申し上げます。

その後、医療の高度専門化、地域人口増に対応して昭和50年度から6ヶ年計画に増改築工事を実施し、病床数も四〇〇床とし、昭和56年4月より小児科・産婦人科も新設して医療法に基づく総合病院の認可を受けております。昭和61年に臨床研修指定病院、昭和63年に外国医師、歯科医師臨床研修病院の指定を受け高い医療水準を維持すべく努めております。現在は、石原運雄(内科)、鈴木秀(外科)、並木徳重郎(泌尿)の三副院長のもと常勤医師56名、17診療科で運営されており、学会認定施設として18の指定を受けており、市原市の中核病院として労災に限らず地域密着型病院としての機能を発揮しております。御承知の方もおられると思いますが当市は面積として

は全国で第2位、30のゴルフ場を持つ広大な市であります。県立鶴舞病院、帝京大市原病院と共に地域医療を支える一翼を担っております。17診療科はいづれも千葉大学関連施設であり、距離も近いことから日頃大学病院の先生方にいろいろと御援助を頂いております。この紙面をお借りして厚く御礼申し上げます。しかし、職員一同懸命に努力をしておりますが、近年の行財政改革の波は当院にも及んで参ります。特殊法人の見直しの旗印のもとに政策医療を如何に推進すべきかの問題に当面しております。最初に述べました様に京葉工業地帯の労災対策として設立を要請されたものです。が、工業の近代化と共に従来型の労災は減少しております。現在は勤労者の健康保持、疾病の早期発見、更に職業、職場に起因する疾病の予防とその対象は広く深くなっております。今後は、臨床、基礎医学を問わず大学の御指導、御援助が必要となって参ります。宜しく御支援の程を御願い申し上げます。最後にになりましたが私は昭和32年卒業、インターン終了後第二外科に入局中山恒明、佐藤博両教授に外科の御指導を受け、

千葉県がんセンター長就任の挨拶



長山 忠雄 (昭38卒)

昭和51年小児外科診療科新設に伴い同科に移り、平成6年より医学部長を務めさせて頂き本年3月31日付で退官致しました。

平成9年4月、千葉県がんセンターのセンター長を拝命しました。初代の福岡誠吾(昭19年卒)、嶋村欣一(昭23年卒)、澤田勤也(昭28年卒)、鈴木通也(昭31年卒)各センター長に続いて私は5代目にあたります。私は昭和38年千葉大学卒業、千葉大学においてインターン終了後、千葉大学大学院泌尿器科に入学、百瀬剛一名誉教授の指導を受けました。大学院終了後、泌尿器科助手として、主に膀胱がんの研究に従事し、昭和48年1月に開設間もない千葉県がんセンターへ出向し今日に至っております。

千葉県がんセンターは、昭和47年11月に開設、さらに平成3年には増築・改築して機能が拡充強化され、千葉県におけるがん対策の中枢的役割を果たしております。

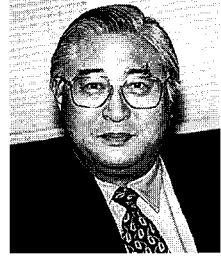
当センターは、各科臓器別の診療科よりなる診療部門、画像診断部、放射線治療部、核医学診療部、手術管理部、臨床検査部、臨床病理部、看護部および薬剤部より成る医療局、研究局、全体の運営を司る事務局より成り立っております。研究局は今年度よりなお一層臨床に直結したがんの遺伝子レベルの研究を中心に行なうことになり、従来より行なってきたかずさDNA研究所との共同研究に加えて、MIT利根川教授グループとの研究交流も開始しました。また厚生省が進めているがん克服新10ヵ年戦略の一環として行なっているがん診療施設情報ネットワークに今年5月に参加しました。国立がんセンター6施設と地方がんセンター5施設、計11会場をネットワークで接続し、テレビ会議形式で研究交流を行なっております。定例会議は、毎週木曜日午後4時30分から6時まで行なわれています。機会

がありましたら是非ご参加ください。

千葉県がんセンターの特色は、医療局・研究局を問わず各科領域がよく連携して、従来のがん治療の適応をさらに拡大した高度の治療と患者さんのQOLを考慮した医療の開発に積極的に取り組んでいることです。看護の面ではがんの専門性を究めつつも、常に人としての優しさを忘れず温かいケアをおこない、また職員一同、患者さんとのふれあいを大切にし共感できる環境を創ることを努めております。

高齢化に伴い今後がんは増加を続けますが、治療するがんも増えてくるでしょう。医療制度の抜本的改革や医療経済の厳しさのなか、がんの医療も社会の変革にそった対応が必要となります。千葉県がんセンターには21世紀に向けて、さらにがん患者さんの信頼に応えられるよう医療内容の改善充実が求められており、私もその一端を担って努力をしてまいります。同窓の皆様のお一層のご理解とご支援をお願い申し上げます。

名古屋市立大学附属病院長就任の挨拶 名古屋市立大学整形外科講座 松井 宣夫 (昭38卒)



平成9年4月1日より、名古屋市立大学附属病院長を拝命いたしました。昭和60年9月1日付けで、単身名古屋市内立大学医学部整形外科学教室の主任教授として赴任いたしました。それから平成9年9月1日で満十二年を過ぎます。当初から名古屋の地には知人も無く、東京から千葉大学医学部に入学以来は、長年江戸川を越えて生活したことのない人間で、周囲の先輩、同僚、後輩からも落下傘で着陸するようなものと慰められたのか、おどされたのか、全身不安でいっぱいでした。

就任当時の教授はわずか5人、来年には私を含めて、生化学佐々木教授、小児科和田医学部長のたった3名となります。お蔭様で整形外科の同門も三百名にならんとしております。今年は第四十一回日本リウマチ学会の総会、日本整形外科学会、骨、軟部腫瘍学術会会長を5月と7月に担当させていただきました。さて附属病院長を拝命し、教授職にも増して、よくこんな多種多様な事があるなあと、多少とまどつてます。体力の方はサッカー、山岳部で鍛えた我が身をフルに使っており、ビクともしません。しかし優雅に海外渡航したり、優雅に絵を描いたり、唯一、体力の維持のためのスポーツ、ゴルフをやる時間が無く、多少なげいております。

さて我が名古屋市立大学附属病院は、基本設計も終え、平成13年に十七階建ての新病棟改築の完成を目指して、目下着々進行中です。また患者サービスの面からも、分り易い診療科を目指して、臓器別、疾患別の再編成を院長として手がけております。まずは内科の三講座、外科の二講座から再編成に着手しつつありますが、講座の壁は厚く、関連病院とのかわりも多く、また卒業後研修制度の二年化、公立大学医学部の定員削減も必至などのバックグラウンドには困難が山積されております。しかし将来を見据えて一人でも多くの優秀な人材の維持が必須であり、あれやこれやと頭を悩ます毎日であります。一気に実行困難と思いますが、前向きな姿勢で着々と前進する以外はアリヤーセンと思っております。東海地区には現在、るのな同窓会員は大正10年卒の金田敏治先生以下43人の会員がこの地で活躍されております。先月7月に20人ほどの同窓の方々に私の院長就任のお祝をさせていただきました。大変なごやかな会でありました。

定年まであと5年ほどとなりましたが、千葉大学から名古屋市立大学に来てよかったなあと、定年の日に思えるように、一日一日を大切にしていきたいと思っております。千葉大学後輩の学生諸君。名古屋にも頑張っている先輩がおります。是非一度名古屋市立大学医学部を訪れて見て下さい。You are welcome at any time. 末筆ながら皆様の益々

千葉県救急医療センター長就任のあいさつ



平成9年4月1日より、野口照義名誉センター長(昭32卒)の後を請け、千葉県救急医療センター長を拝命しました。私は昭和40年千葉大学卒、インターンを母校で行い、第二内科故齋藤十六教授に入局、本間三郎教授・渡辺昌平教授のご指導のもと、血行力学・血液レオロジーをテーマに学位を賜り大学院を卒業、以後、大学の外で一臨床医として働いてまいりました。昭和50年故稲垣義明教授により第三内科が新設されたときから、非常勤講師として、引きつづき現在の増田善昭教授のご指導をいただいております。

当センターは、千葉県が設立した県内で最初の第三次救命救急センターであり、検見川の浜辺の2万坪の地に昭和55年4月に創設されました。当初は、野口照義先生を中心に伊東範行医療局長(昭44卒、麻酔科)、渡辺義郎診療部長(昭44年卒、脳外科)と私とで、普通の総合病院とは異なった診療の対応、勤務態様のあり方などについて議論を重ねました。そのときの構想が少しずつ変貌しつつ今日の診療体制に至っております。診療の基本方針は、一次・二次の診療施設でスクリーニングされた重症の救急患者を受け入れ、治療を行い、急性期を脱した後は、前医療機関にお戻しして後治療を行っていただくというものであります。なお、95年12月には、国から広域の高度救命救急センターとして認定され、熱傷、中毒、重度外傷、切断肢などにも対応することとなっております。

現在の診療科は、循環器科・脳外科・内科・外科・麻酔科・集中治療科(今年中に整形外科・形成外科が加わる)となっておりますが、救急患者は診療科を越えて係わることが多く、本来的には、「救急科」の単科と扱われるべきなのかもしれません。上記の他、佐藤章検査部長(昭46卒、脳外科)、石川隆一(昭49卒、外科)、中村弘(昭53卒、脳外科)、石橋巖(昭55卒、循環器科)、中村達雄(昭56卒、麻酔科)、八木下敏志行(昭56金沢大卒、神経内科)、高橋良誌(昭58浜松医大卒、集中治療科)の各部長のもとに13名の医長、11名の医師、6名の研修医、の合計40名が現在の常勤医師であります。延べ床面積は約1万6000㎡、病床数は100床、うち20床がICU・CCUですが、本年の10月には2床の熱傷専用病床ができあがります。教育研修施設としては、日本救急医学認定医指定施設として認定されているほか、循環器学会、脳神経外科学会、外科学会、整形外科学会、胸部外科学会、麻酔学会、形成外科学会、病理学会の研修・修練・指導施設としての認定をいただいております。

当センターは、千葉市を中心とする県内のこの地域の高度救命センターとして信頼を得てきたと自負しておりますが、同窓の皆様のご教示とご支援を引き続きお願い申し上げます。

「千葉大学医学部 同窓名簿」(平成九年版)名簿(定価は送料込みで三千円)購入希望の方は、同窓会事務局(内線五〇二六)にお申し込み下さい。

「千葉大学医学部 八十五年史」

「千葉大学医学部 百周年記念誌」右の記念誌に残部がありますので、希望者には進呈いたします。詳しくは事務局(内線五〇二六)にお問い合わせ下さい。

「同窓会員の方々で、医師招聘について、出身医局や大学医学部渉外委員会による斡旋に加えて、本会報による招聘の広告希望がありましたら、その旨を同窓会事務局までお知らせ下さい。随時、掲載致します。なお、その他の内容でも広告掲載を希望する場合も同窓会事務局へご相談下さい。」

医師招聘の
広告掲載のご案内
編集委員会では、本会報が会員間の情報交換紙として、広く活用していただく為に、下記のように、新しい企画を行なうこととしました。ご利用下さい。

平成9年度るのな同窓会
総会議事録

日時

平成9年6月28日

場所

東京都文京区 椿山荘

事業報告

木内理事より昨年度の会務報告がされ、昨年度の会議(常任理事会、総会、四金会)、支部るのな会への大学教員の派遣、同窓会報の充実、るのな同窓会賞の創設、同窓会費自動振替制度の導入について説明があった。

議題

一、平成8年度決算(案)

佐藤理事より決算内容についての説明と新藤・笠川両理事より監査報告があり、決算案が承認された。

二、平成9年度予算(案)

佐藤理事より、昨年度との相違点について説明があり、承認された。るのなは学術賞、るのな国際賞、るのな功労賞(新規)、亥鼻分館への助成が含まれている。

三、役員改選

常任理事に木内政寛(庶務 事業部より)、大浜博利(会計)、伊藤晴夫(会計)、中島祥夫(会計)、鈴木信夫(事業)、矢野明

彦(事業)、国井光智(会計監事)、関東近県ブロックの新たな常任理事として中村武(静岡)、冠木徹彦(埼玉)、柴崎昇(日光)(栃木)、佐藤忠夫(茨木)、沖野澄(群馬)、百瀬孝男(長野)が選出承認された。

四、名誉会員の推薦

近藤副会長より昨年度末に退官された4教授(清水文七、佐藤研一、高橋英世、山口豊)の名誉会員への推薦趣旨の説明があり、承認された。

五、るのな同窓会賞授賞者の決定

嶋田理事より、選考委員会による選考経過と、候補者推薦理由の説明があった。(1面記事参照)

報告事項

一、増田理事から新たに千葉大教授に就任された鈴木生化学2、矢野(寄生虫)、伊藤(泌尿器)、伊東(放射線)の各氏の紹介があった。
二、小幡理事から新たに女子医大教授に就任された笠貫宏(昭42・心研内科)教授の紹介があった。

その後、るのな学術賞及び功労賞の授賞式が行われ、本年度新たに作成された立派な楯及び副賞が贈られた。

るのな同窓会 平成9年度予算

収入の部

款項目	平成9年度予算額(円)	平成8年度決算額(円)	対前年度決算増減(△)額
会費等	14,200,000	14,853,250	△ 653,250
他会計より受入	350,000	358,517	△ 8,517
寄付金	2,000,000	2,496,559	△ 496,559
雑収入	20,000	334,751	△ 314,751
前年度繰越資金受入	5,098,902	3,702,404	1,396,498
収入合計	21,668,902	21,745,481	△ 76,579

支出の部

款項目	平成9年度予算額(円)	平成8年度決算額(円)	対前年度決算増減(△)額
総務費	6,360,000	4,636,236	1,723,764
事業費	11,540,000	7,610,343	3,929,657
積立金	2,200,000	4,400,000	△ 2,200,000
次期繰越収支差額	0	5,098,902	△ 5,098,902
予備費	1,568,902	0	1,568,902
支出合計	21,668,902	21,745,481	△ 76,582

るのな同窓会報新旧編集委員の集い

去る平成9年7月12日(土)午後5時から千葉駅ビル5階のペリエホールにおいて、るのな同窓会学生編集委員および現在の編集委員による合同の会合がもたれた。このような会合は、筆者の記憶では確か初めての試みであったかと思う。参加された先生方は総勢15名で、20数年振りに顔を合わせた編集委員もいらした。

司会には筆者が指名された。まず最初に、井出源四郎るのな同窓会会長から学生編集部時代のエピソードを交えた思い出が語られ、次いで現在の編集委員会について、歴史的な流れを話



された。その後、豪華な料理を前にして乾杯に移り、どんよりとした梅雨空を晴らすのがとく話が弾んだ。

宴が進む中、参加された先生方から当時の思い出話や同窓会報への意見が交わされた。特に原紀道先生から、神奈川るのな同窓会報の創刊号から数冊のバックナンバーが回覧され、その立派な出来栄は、本紙に勝るものであった。

また鈴木信夫現編集委員長から、新たな編集方針などが話され、会員への協力が必要とされた。

今回参加された先生方を紹介する。括弧内に卒業年

- 飯島俊雄(昭4)
鴻 忠義(昭13)
高野 典(昭15)
西村幸夫(昭18)
田村正勝(昭22)
梅田 弘(昭23)
高木一男(昭24)
遠藤啓三(昭24)
安岡陽三(昭25)
塚田悦男(昭37)
辻 淳子(昭55)
- 天野富馨(昭10)
岩田恵夫(昭14)
鈴木敏雄(昭16)
塚本 胖(昭19)
高木紹夫(昭23)
鈴木忠雄(昭24)
松本三郎(昭24)
日比谷寿夫(昭24)
山口 裕(昭27)
鈴木清磨(昭38)
篠塚正登(昭56)
- 細井四郎(昭12)
大村健二(昭14)
鬼頭研二(昭16)
福田安平(昭20)
野上良介(昭23)
布廣茂雄(昭24)
菅 良三(昭24)
羽生和敏(昭25)
下沢淳海(昭31)
吉田哲夫(昭40)
岩堀 晃(昭60)

おくやみ

は、菅原宏(39・旧)、里村洋一(41・旧)、村山正昭(45・旧)先生であった。

話が弾む中、最後に萩原彌四郎同窓会名誉会員のご挨拶があり、次回の会合を約し散会した。

(柳橋雅彦 記)

編集後記

空は高く、窓外の虫の音に秋の気配を感じます。国の政策としての行財政改革が進行中ですが、医療・医学教育にも自己点検評価を含め急速な改革の波が押し寄せ、その対応に亥鼻キャンパスは立ち向かっています。

「るのな」一一五号は従来の一・五倍にボリュームが増しました。これは同窓会総会関連、同窓会賞・

功労賞関係記事もあります。が、人事での昇任、就任での顔写真入り挨拶も多く、これは同窓諸氏のアクティビティーの高さを現しています。るのなは随想も回を重ね、我々が知らないこと、噂で聞いていたことなどが事実にもとづいて語られ、何か温かくじんとしたものを感じます。この号も各地から、そして卒業年からの「るのな」便りが多く、顔写真と名前を見て当人のみならず嬉しくもあり、懐かしくもあり、次はなんとか自分達だと思っていることと思います。全国津々浦々にいる同窓の諸兄姉はこの「るのな」が亥鼻キャンパスの現状、同僚・先輩・後輩・学生の動向を知る唯一の情報紙として楽しみと期待の気持ちで待たれているものと思えますし、これを充実させていく責務を編集委員は実感しています。

新旧編集委員が集まり、昔の良さを踏襲し、更に、多くの情報収集をし、きめ細かい伝達手段として、会員の皆様に喜ばれる会報にしたいと話しました。真摯に受け止め、進取の気概で取り組みますので、どんどんアイデアと前向きな意見をお寄せ下さい。

(北原宏 記)